

考古学から見た夫余と沃沮

Fuyu and Woju Viewed from an Archaeological Perspective

宮本一夫

MIYAMOTO Kazuo

はじめに

①夫余の考古学

②沃沮の考古学

おわりに—夫余・沃沮と東夷

【論文要旨】

夫余は吉長地区を中心に生まれた古代国家であった。まず吉長地区に前5世紀に生まれた触角式銅剣は、嫩江から大興安嶺を超えオロンバイル平原からモンゴル高原といった文化接触によって生まれたものであり、遼西を介さないで成立した北方青銅器文化系統の銅剣であることを示した。さらに剣身である遼寧式銅剣や細形銅剣の編年を基に触角式銅剣の変遷と展開を明らかにした。それは吉長地区から朝鮮半島へ広がる分布を示している。その中でも、前2世紀の触角式鉄剣Ⅱc式と前1世紀の触角式鉄剣Ⅴ式は吉長地区にのみ分布するものであり、夫余の政治的まとまりが成立する時期に、夫余を象徴する鉄剣として成立している。前1世紀末から後1世紀前半の墓地である老河深の葬送分析を行い、副葬品構成による階層差が墓壇面積や副葬品数と相関することから、A型式、B型式、C・D型式ならびにその細分型式といった階層差を抽出する。この副葬品型式ごとに墓葬分布を確かめると、3群の墓地分布が認められた。すなわち南群、北群、中群の順に集団の相対的階層差が存在することが明らかとなった。また、冑や漢鏡や鍍などの威信財をもつ最上位階層のA1式墓地は男性墓で3基からなり、南群内でも一定の位置を占地している。異穴男女合葬墓の存在を男性優位の夫婦合葬墓であると判断し、家父長制社会の存在が想定できる。A1式墓地は族長の墓であり、父系による世襲の家父長制氏族社会が構成され、南群、北群、中群として氏族単位での階層差が明確に存在する。これら氏族単位の階層構造の頂点が吉林に所在する王族であろう。紀元後1世紀には認められる始祖伝説の東明伝説の存在から、少なくともこの段階には既に王権が成立していた可能性が想定される。夫余における王権の成立は、老河深墓地の階層関係や触角式銅剣Ⅴ式などの存在から、紀元前1世紀に遡るものであろう。

沃沮は考古学的文化でいうクロウノフカ文化に相当する。クロウノフカ文化の土器編年の細分を行うことにより、壁カマドから直線的煙道をもつトンネル形炉址、さらに規矩形トンネル形炉址への変化を明らかにし、いわゆる炕などの暖房施設の起源がクロウノフカ文化の壁カマドにある可能性を示した。さらにこうした暖房施設が周辺地域へと広がり、朝鮮半島の嶺東や嶺西さらに嶺南地域へ広がるに際し、土器様式の一部も影響を受けた可能性を述べた。こうした一連の文化的影響の導因を、紀元前後に見られるポリツェ文化の南進と関係することを想定した。

【キーワード】 夫余、触角式銅剣、沃沮、クロウノフカ、炕

はじめに

夫余は『魏志』烏丸鮮卑東夷伝によると、南に高句麗、東に挹婁、西に鮮卑と接し、北に弱水があるという。弱水に関しては白鳥庫吉（1896）以来検討されてきているが、今の黒龍江あたりを考えるのが最も妥当である。夫余のおおよその範囲は、それらの位置関係からして、第二松花江流域の吉長地区ということになろう。考古学的に見れば、夫余の前期は吉林市龍潭山城から東団山遺跡一体がその中心であり、東団山遺跡が平地の一般的な都城すなわち王都として機能していたことが明らかになりつつある。また、東団山遺跡の東側の傾斜面に位置する帽爾山遺跡に墓地が営まれ、夫余の王墓や貴族墓が存在する可能性があり、王都に対する奥津城として機能していた可能性が高い。しかしこれらは発掘調査がなされているものの、その正確な報告が公表されていないことから、考古学的に検討することが不可能である。さらに文献によれば紀元後346年以前には夫余は都を農安に遷都したといわれる。これが夫余後期にあたるが、この時期の考古学的な資料はさらに限られ、遷都後の王城の変化や墓葬の変化などいまだ解明できてはいない。

このような東団山遺跡が位置する吉林市域はもともと西団山文化が存在する地域であり、兩や鼎などの三足器が分布するという意味では、私の言う牧畜型農耕社会の東端にあり、三足器を持たない東夷地域とは接触する地域である〔宮本2007b〕。一方、西団山文化が変化した泡子沿類型には三足器は認められない〔張偉2005〕。土器組成からみれば、この段階に於いて第二松花江流域の吉長地区は東夷の範囲に収まったとすることができるかもしれない。泡子沿類型こそが東団山遺跡が存在する時期の土器様式であり、夫余という歴史上の古代国家が存在した地域である。また、この時期の嫩江中・下流域から松花江上流域にかけては、白金宝文化から漢書二期文化が変化した平洋文化が存在する〔張偉2005〕。平洋文化の内容は、オロンバイルの完工墓地に見られる初期鮮卑の土器に近いものがあり、平洋文化を含めて鮮卑の領域と考えてよいであろう。したがって、吉長地区は夫余、そしてそれ以北が鮮卑ということになり、さらに土器組成でみれば、牧畜型農耕社会の鮮卑と東夷である夫余というふうに区分できる。ただし、『魏志』烏丸鮮卑東夷伝によれば、夫余は「兄死妻嫂與匈奴同俗」というようにレヴィレート婚をなし、社会制度は遊牧社会に近いものであった可能性がある。

始祖伝説において夫余の東明伝説と高句麗の朱蒙伝説が類似していることから、夫余と高句麗が同系の可能性が主張される場合があるが、これは5世紀に高句麗の好太王が東夫余を攻撃し長寿王初年に領土となることから、支配者である高句麗の長寿王が夫余の懐柔策としてその始祖伝説を取り込んだとする白鳥庫吉の説〔白鳥1936〕は正しいであろう。後に東明と朱蒙は同一人物となり、壇君の子というふうに『三国遺事』で記載されるに至る。しかし、もともと夫余と高句麗は社会集団が異なっていたと見るべきであろう。ただし、夫余や高句麗が成立する前後にはこれらの地域において同種の青銅短剣が分布している。これが触角式銅剣である。吉長地区から朝鮮半島に分布する遼寧式銅矛や触角式銅剣は、後に夫余や高句麗が領域する地域を中心に分布しており、二つの古代国家の成立を考えるにあたっては共通の地域的背景を有している可能性がある。ここに、本稿で触角式銅剣について検討する理由がある。



図1 触角式銅剣・鉄剣の分布

(○I式 ●IIa・IIb式 ■III式 ▲IV式 □IIc・V式:1北崗, 2烏拉街, 3飛機嶺, 4土城洞486号墓, 5荒山1号墓, 6荒山3号墓, 7石駅公社, 8西岔溝, 9大嶺郷, 10柏崎, 11伝平壤, 12達田里, 13飛山洞, 14池山洞, 15林堂E地区132号墓, 16タカマツノダン, 17サカドウ, 18老河深)

一方、沃沮は現在の極東南部から朝鮮半島東北部にかけて分布する範囲を指していたであろうことは、林滙らによってこれまで指摘されてきたところである〔林滙 1985・1986〕。考古学的文化名でいえば、極東南部のクロウノフカ文化や中国考古学でいう団結文化に相当する。こうした文化に関して、近年韓国の東海岸の初期鉄器文化とりわけ中部地方の原三国文化と関連があるとする見解〔劉銀植 2006a・2006b〕が主張されている。それは呂字形住居構造や豆満江系統土器の存在から主張されるものである。これらが果たして相互に関連し合う文化であるかには興味があり、その関連性を検証する必要がある。

①……………夫余の考古学

(1) 触角式銅劍・鉄劍

触角式銅劍は、遼寧式銅劍や細形銅劍のような劍身と柄部や柄頭が別鑄されるものとは異なり、むしろオルドス式銅劍などの一鑄式である北方式銅劍の範疇に入る銅劍である。しかし劍身部分については遼寧式銅劍2a式・3式・4式あるいは細形銅劍の劍身形態を持つものであり、遼寧式銅劍と細形銅劍とも密接な関係があるといえよう。ちなみにその分布を示すならば、吉長地区など中国東北部の内陸部から朝鮮半島、対馬、北部九州に見られるものであり(図1)、遼西・遼東の遼寧式銅劍文化とは異なる系統として、内陸部の吉長地区など後の夫余が出現するような地域からの文化発信源が見いだされる銅劍の系統にあたる。

触角式銅劍は、柄頭の文様構成から大きく四つの系統に分かれる[宮本2002]。双鳥文からなるⅠ式。双鳥文が退化し鳥の具象性がなくなり形骸化した文様であるⅡ式が存在する。Ⅱ式はⅠ式の鳥の嘴と胴部の間の空間が環首となるものの、対向した鳥の形態を残しているが、Ⅰ式の鳥の羽部分の文様が斜線文としてデザイン化している。Ⅲ式はⅡ式に類似するが柄下端の鏢部分に小孔からなる耳を二つ持つ点が異なっている。また柄頭の下半部に蕨手文様をもつこともⅢ式の特徴の一つである。Ⅳ式は具象的な双鳥文が文様の原型となっているが、Ⅰ式とは異なり、鳥が振り返った状態で胴部に嘴をつける意匠が基本である。この意匠が次第に形骸化しデザイン化していく。これらの4種類の柄頭文様は、銅劍の型式変化において系譜を示す組列であり、形式を構成している。さらに柄頭の側面形に注目するならば、Ⅰ式は鳥の側面形を具象的に表しており、頭部と腹部のふくらみがよく分かる。Ⅱ式になると腹部のふくらみは残されているが、頭部は扁平化している。Ⅲ式とⅣ式の側面形が知られるものは、腹部のふくらみがより扁平化する傾向にある。したがって、系譜を示す四つの形式も次第に具象性からデザイン化する傾向にあり、その出現年代はⅠ式、Ⅱ・Ⅲ式、Ⅳ式と新しくなる傾向が認められる。ここにさらに劍身の型式を付加することにより、触角式銅劍

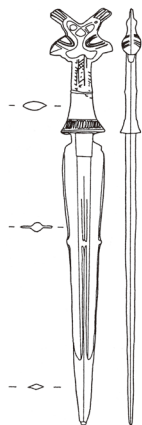


図2 触角式銅劍Ⅰ式
(洋梨地北崗, 縮尺1/8)

の変化過程を知ることができる。なお、劍身の変遷に関しては遼寧式銅劍の編年に基づくものであり、その変遷と実年代に関しては別稿で既に論じている[宮本2008a]。

次に柄頭の形式と劍身の型式との関係を述べたい。触角式銅劍Ⅰ式は唯一吉林省蛟河縣新農鄉興農村洋犁地北崗出土があるが、劍身は突起がかすかに残るものの脊の隆起はない遼寧式銅劍2a式である(図2)。遼寧式銅劍2a式は、杏家莊2号墓の年代から前500年頃以降の年代が考えられる[宮本2008a]。北崗の触角式銅劍Ⅰ式は、柄頭の文様が写実的な双鳥文であるところはオルドス青銅短劍のAⅠ式銅劍と同じであるが、このAⅠ式銅劍の年代を春秋後期後半と考えたことがある[宮本1999]。前5世紀前半であるが、遼寧式銅劍2a式の年代と矛盾はないものである。北崗の触角式銅劍が、オルドス青銅器文化のAⅠ式銅劍など長城地帯青銅器文

化5期〔宮本2008b〕の影響のもとに生まれたものであると考えられる。したがって、この触角銅剣Ⅰ式の年代は前5世紀前半頃のものであろう。

ただし触角式銅剣Ⅰ式が生まれるに際して、双鳥文をもつ北方青銅器文化とどのようにして接触したかという問題が残る。まず確認すべきは、触角式銅剣は、東北アジアに存在する遼寧式銅剣や細形銅剣とは異なり、柄と剣身が同鑄であることに特徴がある。そして柄の双鳥文は、オルドス青銅短剣A1式のみならず、ミヌシンスクのタガール文化や外モンゴルのチャンドマン文化などユーラシア草原地帯の北方青銅器文化の特徴的な意匠である〔宮本2008b〕。しかしこうした意匠は遼西の夏家店上層文化には知られない。とすれば、吉長地区における触角式銅剣Ⅰ式の文様意匠がどのよう

にして出現したかが改めて問われることになる。注目すべきは、既に指摘した平洋文化など吉長地区の泡子沿類型に接する文化にある。平洋文化は嫩江流域から大興安嶺山脈を越えオロンバイルの完工墓地などとも類似した土器様相を示している。そして、オロンバイルがモンゴル高原と接しているという事実に注目せざるを得ない。タガール文化やチャンドマン文化には双鳥文の銅剣が存在し、モンゴル高原からオロンバイルさらに大興安嶺を超え、嫩江流域の漢書二期文化などを介して、双鳥文をもつ北方青銅短剣との接触の中に触角式銅剣Ⅰ式が生まれたと想定したい。

触角式銅剣Ⅱ式は4例などが知られている(図3)。吉林省永吉県烏拉街出土、吉林省長白朝鮮族自治州十四道溝鎮飛機嶺出土、平壤市土城洞486号墓⁽¹⁾、吉林省東遼県石駅公社出土の4例である。烏拉街は剣身の刃部に段部をもち段部まで脊の研ぎが見られる遼寧式銅剣3a式であり(図3-1)、触角式銅剣Ⅱa式と分類できる。飛機嶺のものは剣身が折れており、正確な剣身の型式は不明であるが、脊の研ぎは鏢部分まで伸びており、遼寧式銅剣3b式あるいは4式と考えられ(同2)、触角式銅剣Ⅱb式である。土城洞486号墓は刃部に段部をもち関の稜線が鏢部分まで延びる遼寧式銅剣3b式であり(同3)、触角式銅剣Ⅱb式である。烏拉街と土城洞486号墓の触角式銅剣Ⅱ式がともに刃部に段部をもつ遼寧式銅剣3式であるところから、飛機嶺の剣身も遼寧式銅剣3b式である可能性が高い。烏拉街のⅡa式と飛機嶺のⅡb式では剣身に型式差が認められるように、烏拉街では柄頭の鳥文様の胴部に相当する部分が比較的膨れているが、飛機嶺になるとより扁平化しており、柄頭の側面形からも時期的な退化が認められる。石駅公社のものは全長69cmと長大であり、剣身が鉄剣からなる触角式鉄剣Ⅱc式である(同4)。青銅である銅柄とは溶接ないし鉄剣を作ったのち銅柄を鑄造する際に差し込みで銅柄が鑄造されたものであろう。Ⅱa式の烏拉街(遼寧式銅剣3a式)

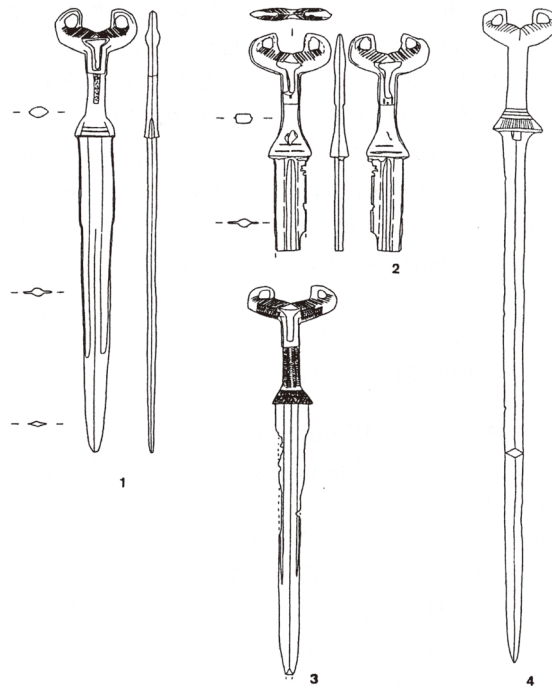


図3 触角式銅剣・鉄剣Ⅱ式

(1烏拉街, 2飛機嶺, 3土城洞486号墓, 4石駅公社, 縮尺1/8)

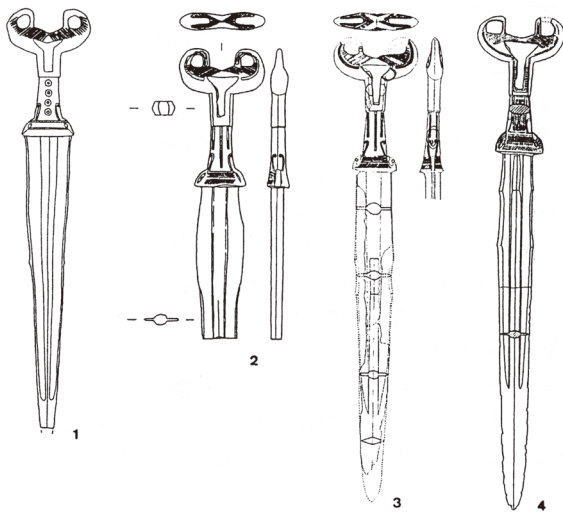


図4 触角式銅剣Ⅲ式

(1大嶺郷, 2慶応大学蔵, 3柏崎, 4大英博物館蔵, 縮尺1/8)

触角式銅剣Ⅲ式は黒龍江省大嶺郷出土、慶応大学蔵、唐津市柏崎出土、大英博物館蔵の4例がある(図4)。大嶺郷出土のものは正確な図面がないが、観察結果によれば、刃部にかすかな突起があり、突起部に対応する脊の隆起はないものである(図4-1)。遼寧式銅剣2a式に相当し、Ⅲa式とする。慶応大学蔵は山本悌二郎氏旧蔵のもの〔梅原1933〕で、剣身の前方部が欠損しているが、刃部過半部がふくらみを持つものであり、刃部の突起がない遼寧式銅剣2b式の刃部過半部に類似している(同2)。これをⅢb式とする。柏崎出土のものは剣身が細形銅剣を呈しており、朝鮮半島製のものであろう(同3)。剣身は細形銅剣BIc式の特徴を示しており、Ⅲc式である。側面形態からいえば、Ⅲb式の慶応大学蔵のものの方が鳥腹部に相当する部分に膨らみが残っており、Ⅲc式の柏崎出土のものはより扁平化しており、退化傾向を示している。柏崎出土のものの方が年代的に新しいこと

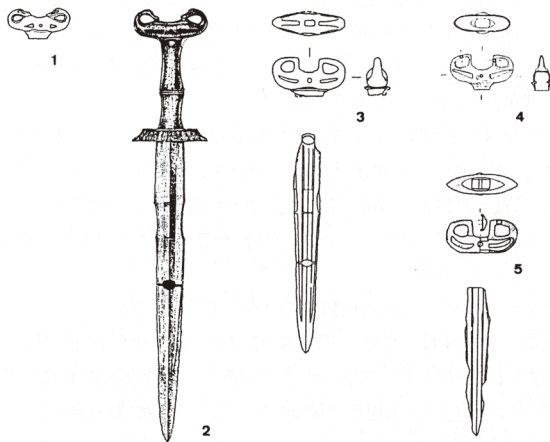


図5 触角式銅剣Ⅳ式

(1伝平壤, 2飛山洞, 3タカマツノダン, 4林堂132号墓, 5サカドウ, 縮尺1/8)

が前4世紀～前3世紀、Ⅱb式の飛機嶺と土城洞486号墓(遼寧式銅剣3b式)が前3世紀である。Ⅱc式である石駅公社の鉄剣銅柄は遼寧省西豊県西岔溝でも出土しているが、西岔溝の漢系出土遺物は前2世紀後半から前1世紀初頭に限られており、大半が前2世紀のもと考えられている。石駅公社のⅡc式も前2世紀のものであろう。なお、Ⅱb式に類似するが、触角の文様が異なる遼寧省本溪県朴堡出土例〔梁志龍・魏海波2005〕は、剣身は同じように遼寧式銅剣3b式であることから、Ⅱb式と分類しておきたい(図6-4)。

を示している。大英博物館蔵のものは細形銅剣BⅡc式であり(同4)、さらに年代的に降るものであり、Ⅲd式である。

触角式銅剣Ⅳ式は、平壤出土、大邱市飛山洞出土、慶山市林堂E地区132号墓出土、対馬タカマツノダン出土、対馬サカドウ出土などがある(図5)。さらに近年では京畿道加平郡達田里遺跡でも鳥形のⅣa式が鉄剣とともに出土している〔武末2004〕。また大邱鳳舞洞遺跡からも新たな触角式銅剣の出土例が知られると(3)いう。このように、出土が朝鮮半島から対馬にかけてみられ、これらが朝鮮半島で製作されたものの可能性が高い。これ

らは剣身と柄頭が別鑄であり、剣身で型式の分かるものはすべて細形銅剣 BⅡc 式である。柄頭の形態からすれば、平壤出土（図 5-1）や飛山洞出土（同 2）あるいは達田里出土のものが写実的な水鳥の姿を映しているのに対し、林堂 132 号墓出土（同 4）、タカマツノダン出土（同 3）、サカドウ出土（同 5）のものは具象的な文様ではなく双鳥がデザイン化しており、区別できるとともに年代的には遅れて出現したものと推定できる。前 2 者の双鳥を象ったものをⅣa 式とすれば、後者はさらに細分できる。後者のうち平壤出土や飛山洞で見られた鳥腹部の下に見られた三角形の透かし部が細長い二等辺三角形に延びた林堂 132 号墓やタカマツノダンがⅣb 式である。Ⅳa 式の柄頭には双鳥が対向して尾部と尾部がくっつく部分でくびれていたであろうが、林堂 132 号墓の柄頭の上面形はⅣb 式の中でもくびれ部が痕跡的に残っており、タカマツノダンより相対的に古いものと考えられる。さらに形態変化したサカドウ出土のものであり、透かし部が曲線化しているとともに全体が角張ってきている。これをⅣc 式とする。触角式銅剣Ⅳ式は、剣身がすべて細形銅剣Ⅱc 式であり型式差は認められないが、柄頭の形態変化からは、Ⅳa 式→Ⅳb 式→Ⅳc 式と変化していくものと推定される。

また、触角式鉄剣Ⅱc 式の系譜を引くと考えられるもので、把手下端の文様はⅡc 式と類似するが、触角部分がなくなり、おそらくはこの部分に骨製ないし木製の柄頭が差し込まれるものが存在する。剣身は鉄剣であり、Ⅱc 式が変化したものと考えられ、触角式鉄剣Ⅴ式（図 6-13）と分類できる。

以上をまとめるならば（図 6）、オールドス青銅短剣の柄頭文様の影響を受け、その段階に存在した遼寧式銅剣 2a 式の剣身部分を結合させて触角式銅剣が吉長地区など遼東内陸部に前 5 世紀前半に生まれた。これがⅠ式である。その意味では、松嫩平原からオロンバイルさらにモンゴル高原という青銅器文化の伝播ルートがあり、シラムレン河以南の遼西とは異なった北方青銅器文化の系統が存在していた可能性がある。内蒙古中南部からモンゴル高原さらにミヌシンスク盆地までの青銅器文化は、カラスク文化期以降特に密接な関係を有しており [宮本 2008b]、この流れの支脈がオロンバイル平原から松嫩平原へ入ってきた可能性がある。遼西北部に見られる矛式銅剣も、その系譜はカラスク文化期のⅡ式銅剣 [宮本 2007a] にあり、その成立のための接触ルートは同じくモンゴル高原からオロンバイル平原さらに松嫩平原という流れが想定できるのである。

さらに柄頭文様が形骸化してデザイン化したⅡ式とⅢ式が出現するが、Ⅲa 式の方が剣身の型式からすれば今のところⅡa 式より古い段階に出現しており、前 5 世紀後半には出現する。さらにⅢb 式は遼寧式銅剣 2b 式であり前 5～4 世紀、Ⅱa 式が遼寧式銅剣 3a 式からなり前 4～3 世紀に、遼寧式銅剣 3b 式のⅡb 式・Ⅱ'b 式は前 3 世紀に出現している。さらにこの段階で触角式銅剣Ⅲc 式が朝鮮半島で出現する。Ⅲd 式は前 2 世紀に朝鮮半島で製作されたものであり、この段階以降にⅣa 式が製作されている。Ⅲc・Ⅲd 式は、おそらく朝鮮半島北部で製作されたものと想定される。衛満朝鮮以後の大同江流域には文献によれば朝鮮王否や準が存在したとされるように、何らかの政治体が存在していた可能性がある。触角式銅剣Ⅲc 式は、こうした政治体によって前 3 世紀に製作されたものであろう。一方、前 2 世紀には図 1 に示すように第二松花江流域の吉長地区では鉄製剣身によるⅡc 式が出現し、朝鮮半島のものとは大きく異なっていく。

Ⅳa 式は伝平壤出土品があるように、大同江流域の朝鮮半島北部に起源がある可能性がある。その点で京畿道達田里 2 号墓出土品が注目される。木棺墓であるとともに、楽浪系の花盆形土器があ

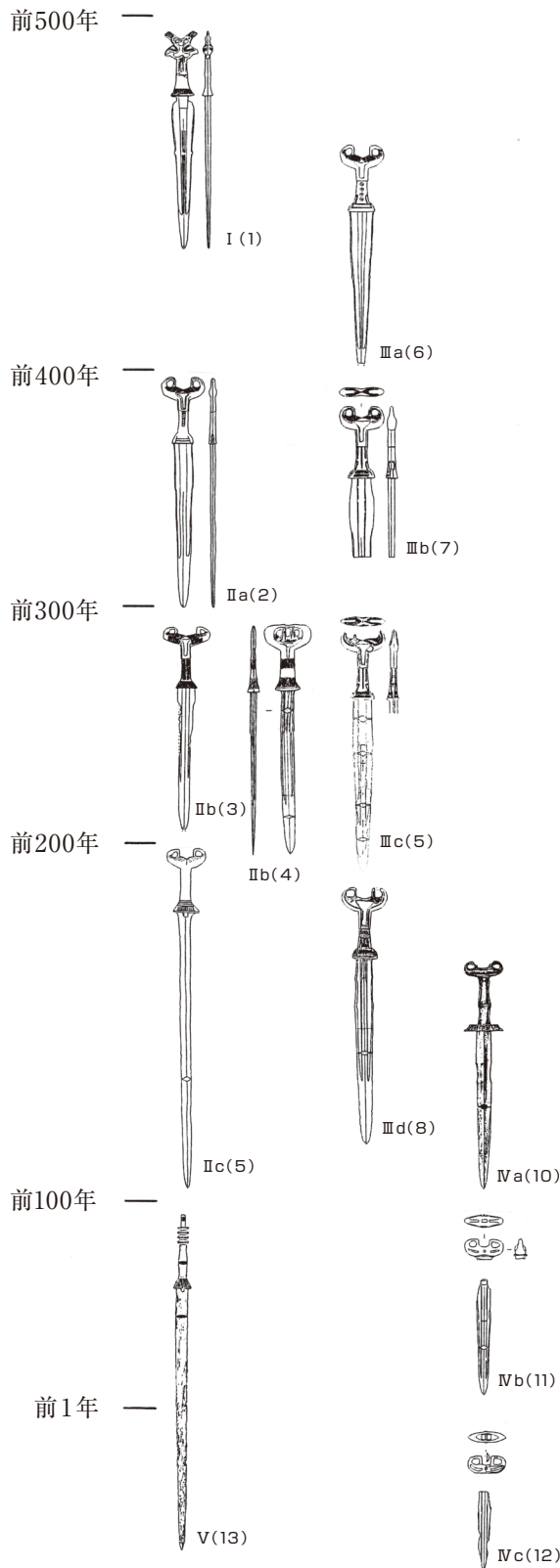


図6 触角式銅剣・鉄剣の変遷

(1)烏拉街, 2飛機嶺, 3土城洞486号墓, 4朴堡, 5石駅公社, 6大嶺郷, 7慶応大学蔵, 8柏崎, 9大英博物館蔵, 10飛山洞, 11タカマツノダン, 12サカドウ, 13老河深41号墓, 縮尺1/15)

り, 大同江流域との関係が考えられる。楽浪系土器は古段階の土器であり, 概報も指摘しているように, 古朝鮮流民が衛満朝鮮滅亡の混乱期に移動してきたという『魏略』の記事から, 楽浪郡成立期の墓地である可能性が高いであろう。したがって前1世紀の墓地である可能性が高い〔武末2004〕が, IVa式触角式銅剣の製作年代は墓地形成期より当然古い可能性がある。達田里2号墓のものは剣身が鉄製であり, 新しい要素を含んでいるが, その製作地は花盆形土器とともに, 大同江流域である可能性が高い。したがって楽浪郡設置以前の衛満朝鮮のものである可能性を考える必要がある。ところで, 双鳥文という文様の系譜を引きながら, IIId式に代表されるように朝鮮半島で前2世紀に製作されたものは既に双鳥文が形骸化し, 本来の意味が忘れられていた段階に, 復古的に双鳥の意匠を意識して製作されたものがIVa式である。さらにIVa式は, 柄と剣身が別鑄であるという遼寧式銅剣や細型銅剣の伝統を忠実に受け入れているものである。その点でも, これまでのI式からIII式が柄と剣身が同鑄であるという北方青銅器文化の伝統を引くものと異なり, 朝鮮半島で独自に開発された可能性が高い。さらにその復古的な意匠が生まれた背景には, 新たなアイデンティティの創成と関連している可能性が高いであろう。推測を交えていうならば, 衛満政権期における在来の朝鮮半島の独自性を強調しながら漢王朝とは異なったアイデンティティを強調する中で生まれたのが, この復古的双鳥文であるIVa式であったのでないだろうか。その点で, それを埋葬した達田里2号墓の被葬者は衛満朝鮮滅亡による移民であったと考えたいところである。そうした

見解が妥当であることが許されるならば、IVa式触角式銅劍の製作年代は前2世紀後半まで遡らせることができるものと思われる。

一方、IVb式はその分布状況から前1世紀に朝鮮半島南部で製作されたものと考えられ(図1)、IVc式は前1世紀から紀元後1世紀の間に製作されたものであろう。ちなみに鉄製劍身の触角式銅劍であるIIc式は西岔溝墓地からも出ているが、ここではIIc式以外に柄頭の触角部分がなくなったより新しい段階の触角式鉄劍V式も含んでいる。西岔溝墓地の漢系遺物には草葉文鏡や渦状虺文鏡など前2世紀後半の鏡が多く、岡村秀典のいう異体字銘帯鏡I式[岡村1984]など前1世紀初頭のものだけが僅かにみられる。半両銭や五銖銭などが副葬品に伴っており、ほぼ漢の武帝期のものである。したがって形式的に古い触角式鉄劍IIc式は前2世紀後半に、それより新しい触角式鉄劍V式は前1世紀に大半が納まるものであろう。そして、それらの分布は第二松花江流域の吉春地区に限られている(図1)。

以上のように、触角式銅劍の編年も柄頭部の型式変化とともに、劍身の遼寧式銅劍や細形銅劍の型式変化が対応しており、その年代観においても矛盾のないものであることが確認できたであろう。と同時に、後に夫余という政治体が生まれる吉長地区を中心として出現した触角式銅劍が、その後には朝鮮半島北部の大同江流域を中心として発達し、さらにはその一部が中部からさらに弁辰地域と広がり、弁辰との交渉関係の中に対馬に広がる(図1)という事実が判明した。

(2) 夫余の出現

夫余が政治的なまとまりとして出現していくのは、紀元前300年頃の燕遼東郡の設置からさらに漢王朝の楽浪郡の設置に至る漢民族の直接支配への脅威から生まれたものとするができるであろう。また、一方では、統一秦期における匈奴遊牧国家の成立も一定の刺激を与えている。これら漢王朝と匈奴に直接接している地域が、鮮卑であったり夫余であったりということができるであろう。鮮卑は先に述べた平洋文化など嫩江流域からオロンバイル平原にかけて位置しており、夫余は吉長地区がそれらの領域ということになる。夫余は遼東郡や玄菟郡あるいは楽浪郡に取り囲まれる形で、その政治的なまとまりを示していくようになる。

ところで、先に述べた触角式鉄劍IIc式・V式こそが、この夫余を特徴づける武器ということができるであろう。鉄製劍身と触角式銅柄からなる触角式鉄劍IIc式とV式は、前2世紀から前1世紀に存在するものであり、まさに楽浪郡成立前後の時期に当たっている。こうした時期に、これら触角式銅劍は遼寧省西豊西岔溝墓地や吉林省榆樹老河深墓地からも多数出土している。残念ながら西岔溝墓地は正式報告書が発行されておらず、その全容は明確ではない。一方で、老河深墓地は既に報告書が刊行されており[吉林省文物考古研究所編1987]、葬送分析によって社会階層を分析することが可能である。そこで、葬送分析によって老河深墓地の分析を試みたい。

老河深墓地は、下層の西団山文化末期の段階と、夫余を特徴付ける中層墓地段階、さらに靺鞨文化期の上層段階に分かれている。ここで分析の対象は中層墓地段階の129基に及ぶ。その年代は、出土している漢鏡からも前漢末～後漢初期のものであり、紀元前1世紀後半から紀元後1世紀前半に納まるものである。おそらくは三世代程度の比較的短い期間での集団墓であろう。

報告書によれば、一対の男女合葬墓が2基発見され、さらに男女の対となった異穴合葬墓が20

表1 老河深墓地の副葬品構成型式

	冑	武器	工具	馬具	装身具
A(素環刀 or 劍)					
A1	○	○	○	○	○
A2		○	○	○	○
A3		これらの内、どれか二つを含む			○
A4		これらの内、どれか一つを含む			○
A5					○
B(素環刀・劍をもたず装身具あり)					
B1		○	○	○	○
B2		○	○		○
B3		どちらか一つを含む			○
B4					○
C(素環刀・劍・装身具なし)					
C1		○	○	○	
C2		どちらか一つを含む			
D(土器 or なし)					
D1(土器のみ)					
D2(副葬品なし)					

組存在するとする。これら合葬墓は同穴であろうと異穴であろうと男性が向かって右、女性が左と
いった決められた配置基準が存在している。またこれら男女合葬墓は、基本的に男性が素環刀や触
角式鉄劍V式を中心とした武器など他種類の副葬品からなり、女性墓が簡単な工具や装身具の副葬
品構成をなしている。こうした副葬品構成の性差やあるいは男性墓の副葬品構成が豊富である点な
どから、男性を中心として有利な社会構成であることが理解されている。これら合葬墓が必ず男女
から構成されている点からも、これらの男女が血縁関係というよりは夫婦関係であると推定する場
合が一般的であろう。すなわち男系相続原理をなす家父長制社会であった可能性が高いであろう。

墓葬分析において性別は重要な要素であるが、ここではすべての人骨の性別判定が示されていな
いところから、分析の対象とすることができない。さて、被葬者の階層制を示す要素として、労働
の投下量を示す墓壙面積、さらに副葬品の多寡やその構成が挙げられる。ところで副葬品の構成は、
土器、武器、工具、馬具、装身具などに分けることができる。武器は素環刀、触角式鉄劍V式や矛、
鉄鏃などからなる。また、冑などの防具も武器に含むことができるであろうが、一方では冑は武人
としての権威の最上位者を示している。工具は刀子、錐、鑿、斧、鋤先、鎌などからなり、馬具は銜、
鑣（鏡板）、馬面、辻金具などからなる。装身具としては、バックル、腕飾、指輪、垂飾品、小玉
などからなる。さらに鏡や鍔など威信財が伴う。これらの中で、武器、工具、馬具、装身具に付加
するように、冑あるいは鏡や鍔が伴っており、冑を有する被葬者が身分上の最上位者であると仮定
できるであろう。冑は武人の最上位者である将軍などの身分表示であり、武人を代表する武器とし
て素環刀や触角式鉄劍V式を挙げることができるであろう。『魏書』烏丸鮮卑東夷伝に「以弓矢刀
矛為兵、家家自有鎧仗」とあるように、兵士は刀などの武器を持ち、家々には家の代表である甲冑
をもっていたのである。

そこで、副葬品の組み合わせからその型式分類を行えば表1のようにまとめることができるであ
ろう。素環刀や触角式鉄劍V式をもつ墓葬をA式とする。このA式を細分すると、権威者の標識
である冑を伴う墓葬をA1式、さらにその他の武器、工具、装身具をすべてもつA2式、さら装身

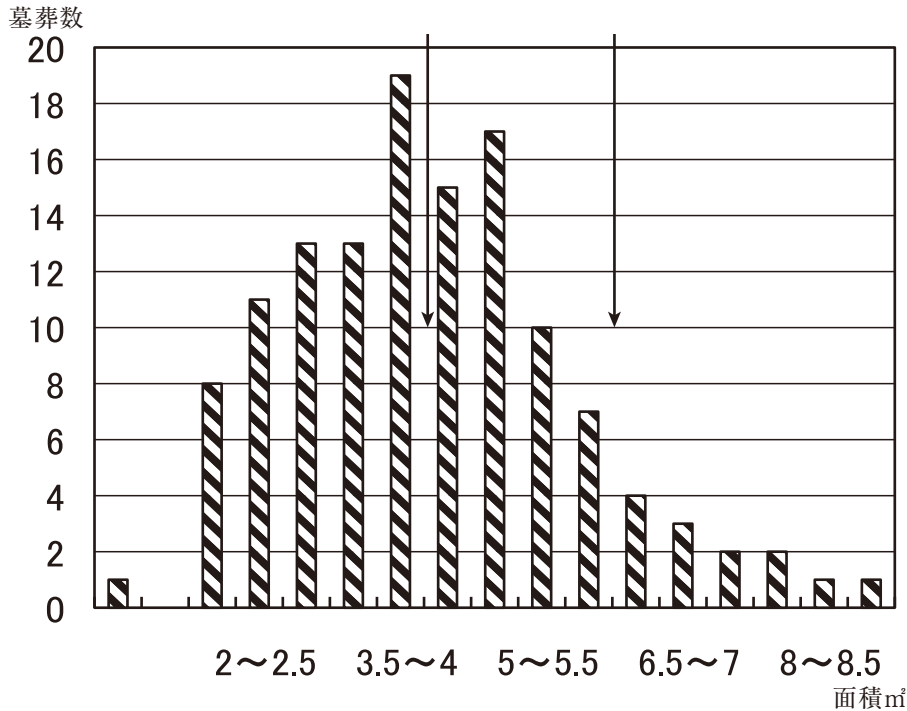


図7 老河深墓地の墓墳面積度数分布表

具を持ち、武器、工具、馬具の内どれか二つの種類の副葬品を有するA3式、さらにそれらの内のどれか一つを含むA4式、さらに装身具のみのA5式に階層的に区分することができる。一方、素環刀や鉄剣をもたず装身具を必ずもつものをB式とする。B式は素環刀や鉄剣以外の武器、工具、馬具をもつB1式、武器・工具を有するB2式、武器と工具のどちらか一つを含むB3式、さらには装身具のみのB4式に細分できる。また、素環刀・鉄剣・装身具をもたない副葬品構成をC式とし、武器・工具や馬具をすべつものをもつものをC1式、武器・工具のどちらか一つをもつものをC2式と区分する。さらに副葬品として土器のみかあるいは副葬品をもたないものをD式と区分できる。D1式は土器のみの副葬品構成を示すもので、D2式は全く副葬品をもたないものである。

これらの副葬品構成が副葬品総数すなわち副葬品の多寡と相関しているかに興味を持たれる。任意に副葬品総数を区切って、それと副葬品構成の区分とを対応させたのが表3である。A式においては、ほぼ副葬品数の多寡とA式細分が階層的に対応していることが理解される。一方でB式細分においては緩やかな階層的な区分として捉えることができるが、A式ほど明確ではない。さらにC式やD式がA式やB式より副葬品数からいえばその下位に位置して

表2 老河深墓地における副葬品構成型式と墓墳面積の相関表

副葬品構成	0~4㎡	4~6㎡	6~9㎡
A1	0	2	1
A2	2	7	4
A3	7	3	1
A4	4	7	1
A5	1	3	0
B1	0	4	1
B2	5	6	0
B3	15	6	1
B4	20	6	4
C1	5	0	0
C2	0	3	0
D1	4	2	0
D2	2	0	0
	65	49	13

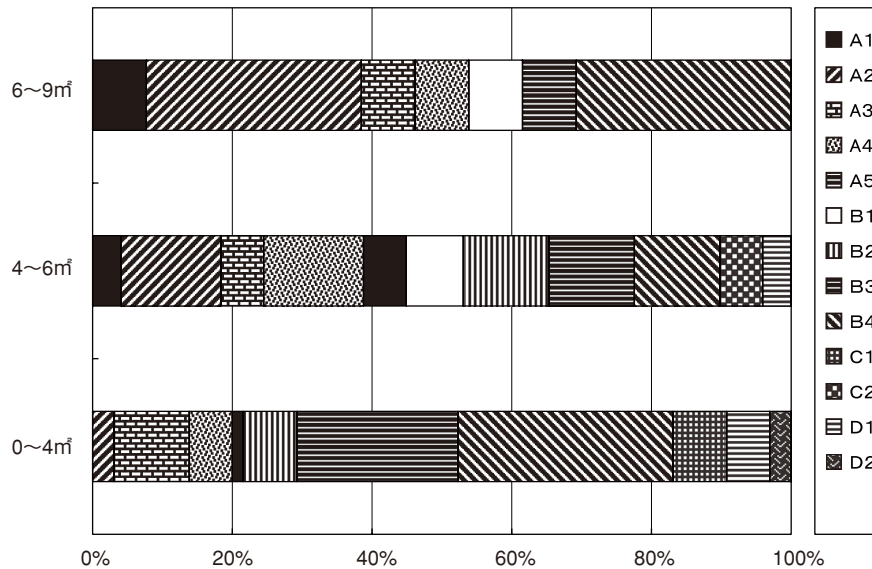


図8 副葬品構成型式と墓壇面積との相関

表3 老河深墓地における副葬品構成型式と副葬品総数との相関表

副葬品構成	0～5個	6～10個	11～15個	16～20個	21～30個	31～50個	51～90個	91～個
A1	0	0	0	0	0	0	2	1
A2	0	0	1	1	2	3	4	2
A3	0	2	2	1	4	0	2	0
A4	0	4	1	1	2	0	1	1
A5	1	1	2	0	0	0	0	0
B1	0	0	1	1	2	0	1	0
B2	2	2	0	2	1	0	0	1
B3	3	3	2	4	4	3	1	4
B4	13	4	4	2	1	1	2	1
C1	4	1	0	0	0	3	0	0
C2	3	0	0	0	0	0	0	0
D1	6	0	0	0	0	0	0	0
D2	2	0	0	0	0	0	0	0
	34	17	13	12	16	10	13	10

いることは明確である。副葬品構成にみられる型式を副葬品構成型式と呼べば、副葬品構成型式は副葬品の多寡化から見れば階層差に相当している可能性が高いことが判明した。

さらにその蓋然性を確かめるために、副葬品構成型式と労働の投下量を示す墓壇面積との対応を検討してみよう。墓壇面積の度数分布を示したのが図7である。この図からは度数分布の急激な落ち込みから判断して少なくとも三つのグループに分けうる可能性がある。墓壇面積4㎡付近と6㎡に落ち込みが見られ、墓壇面積0～4㎡、4～6㎡、6～9㎡の三つに区分することが可能であろう。墓壇面積が示す労働投下量の差が仮に被葬者の生前の階層差を反映しているとするれば、副葬品構成型式もこれと相関するはずである。その対応関係を示したのが、表2である。この表あるいはそれを視覚的に示した図8で理解できるように、副葬品構成A型式は墓壇面積と階層的な対応関係を示している。同じように副葬品構成A型式と副葬品総数との関係を示したのが表3であり、両者

- A1
- ▣ A2
- ▨ A3
- ▤ A4
- A5

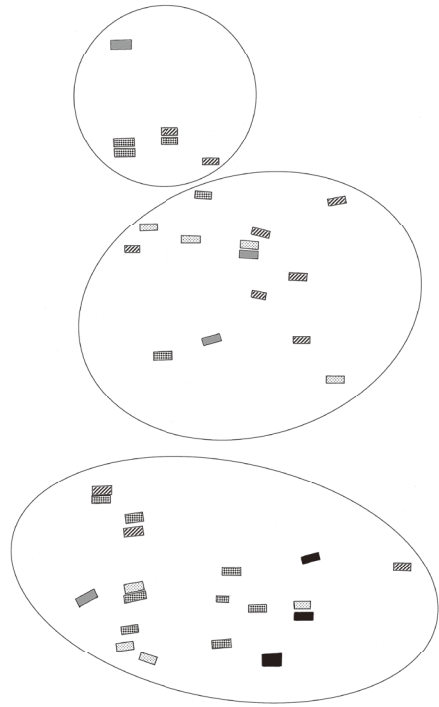


図9 老河深墓地における副葬品
構成A式の分布

- ▣ B1
- B2
- ▨ B3
- ▤ B4

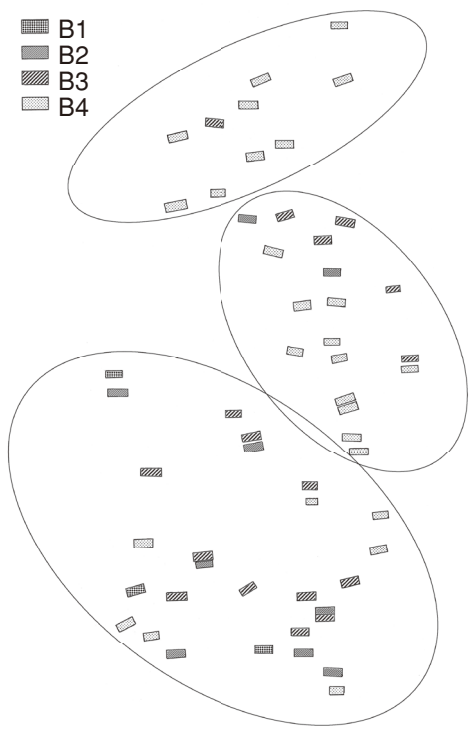


図10 老河深墓地における副葬品
構成B式の分布

- ▣ C1
- ▤ C2
- ▨ D1
- D2

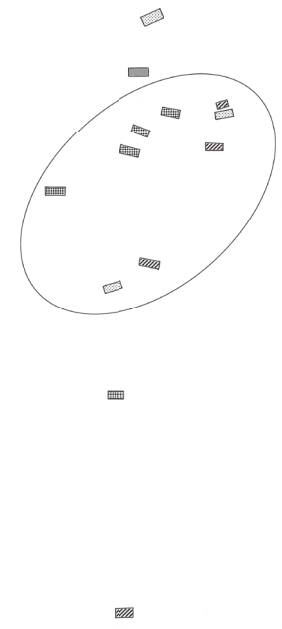


図11 老河深墓地における副葬品
構成C・D式の分布

はほぼ相関している。副葬品構成 B 型式は相対的に A 型式より低い階層的な関係を示しているが、B 型式内での階層的な関係は A 式ほど明瞭ではない。これは副葬品数との関係と同じ結果を示している。さらに副葬品構成 C 式や D 式は、その細分型式においては必ずしも明確ではないが、それらが相対的には階層的に低い位置に位置付けられることは再確認ができた。また、副葬品をもたない D2 式が最下層であることは、墓壙面積との対応関係でも示すことができたと考えられる。

A 式は素環刀や鉄剣を有することから武人階層を想定できるが、報告書で確認できる古人骨の性別から見れば、すべてが男性に対応しているわけではなく少数の女性も含まれる。これは族的に武人階層に包含された集団であることを表現した副葬品構成型式であるかもしれない。同じことは装身具を主体的に副葬品とする B 式の場合、女性墓である可能性が想定できる。しかし大半が女性であるが、B 式でも 127 号墓のように男性と判断されている墓葬も存在する。A 式と B 式は相対的に階層の上下関係を示すものであることは、既に二つの分析から示されている。そこで、A 式、B 式、C・D 式という相対的な階層差を示す副葬品構成型式ごとに、その墓葬分布を眺めてみたい。

まず A 式の細別の分布を見たのが図 9 である。分布の周密状態からすれば、大きく三群が存在しているように見いだすことができるであろう。これら三群を南から仮に南群、中群、北群と呼ぶとすると、南群には A 1 型式の副葬品構成型式がまとまっており、その他も A 2 型式や A 3 型式などの比較的階層上位の墓葬が固まっている。これに対して北群は、南群のような A 1 型式は存在しないものの、A 2 型式が比較的多く分布しており、相対的な階層状態は、南群に次ぐ位置づけをなすことができるであろう。これらに対し、中群の方は A 3 型式や A 4・A 5 型式などの比較的階層の低い墓葬が群集している。これら三群の中で相対的に最も低い階層の墓域であることが推定できる。したがって、南群、北群、中群の順に被葬者の社会階層が相対的に低くなっていることが予想できる。

B 式の墓葬分布 (図 10) は、A 式のものほど明確な分布差は認められないものの、B 式と同じように大きく三群に大別することは可能であろう。その中でも B 1 型式や B 2 型式が集中するのは南群であり、A 式の分布と同じように B 式内の階層上位者も南群に集中している。しかし、北群と中群では A 式ほどの階層差は見いだせず、どちらも B 3 型式や B 4 型式が集中している。このことは、B 式が A 式に比べてそれほど型式細分が階層差を表現していないことと関係しているのかもしれない。

一方、C 式や D 式の分布は中群に相当する位置にほぼ集中している (図 11)。このことは中群が A 式において最下位層であるという位置付けに符合するものである。既に副葬品数や墓壙面積との相関関係から最下位層の被葬者であるとするのできる C・D 式が、中群と同じ位置に分布していることは、C・D 式を中群に含めて解釈することを可能にしている。

したがって、A 式、B 式、C・D 式の空間分布からの検討からすれば、南群、北群、中群の順に相対的に階層が低くなっていることが明らかとなったのである。そしてそれらの構成員はともに素環刀や鉄剣を所有する武人が中心であり、それらの大半は男性ということになるであろう。既に報告書で指摘されているように、男系の被葬者集団がその配偶者を近接した位置に埋葬するという原理の中で、空間的にまとまった墓地を形成する様は、それぞれの群が民族的な血縁関係にある群であると想定できよう。すなわち父系による家父長世帯が、血縁的な父系原理の中に氏族墓地として埋葬されていると解釈できよう。老河深墓地とは、三つの家父長制氏族が共有する墓地群であった

のである。その三つの氏族に階層的な格差があり、南群氏族、北群氏族、中群氏族の順に階層差が世代を繋いで存在していたのである。その中で有力氏族であった南群氏族では、56号墓・67号墓・97号墓のような冑や鏡・鍔といった威信財をもつ軍事的首長墓が存在している。これら三つの墓葬は血縁関係による世襲的な三世代の首長といえることができるであろう。まさに世襲的首長氏族が成立していた前1世紀～後1世紀の段階こそ、王権の確立する段階であり、文献に見られる夫余という政治的なまとまりが出現する段階に相当していると考えられることができるであろう。そして夫余では、触角式銅剣Ⅴ式が、吉長地区を中心として生まれていった政治体としてのアイデンティティの表象となっていた可能性がある。

(3) 小結

後漢の『論衡』吉驗篇には、既に夫余の東明伝説が記載されている。後漢にはこのような始祖伝説が一般に流布していたことは、夫余に王権のような政治体が確立していたことを示すものであり、それが前漢にまで遡る可能性を示している。この時期、少なくとも触角式銅剣Ⅴ式が出現し、地域的なアイデンティティが確立している。その社会的状況は老河深墓地の分析でも示されたように家父長制氏族社会を基盤とするものであり、このうちの有力氏族によって王権が確立したのである。

それ以前の前2世紀には夫余では触角式鉄剣Ⅱc式が生まれている。吉長地区を中心に認められる触角式鉄剣Ⅱc式やⅤ式こそ、夫余を象徴する鉄剣というようにみなすことができる。そして同じ時期に大同江流域の衛満朝鮮においてもルーツは同じでありながら別な地域的なアイデンティティとして触角式銅剣Ⅳa式が出現する。そしてこれが衛満朝鮮の崩壊とともに中部地域へ流民とともに広がり、さらには嶺南地域すなわち弁辰地域において独特な武器として触角式銅剣Ⅳa式からⅣb式、Ⅳc式へと変化していく。ある意味では、衛満朝鮮の際に構築された朝鮮としてのアイデンティティが触角式銅剣Ⅳ式として弁辰に引き継がれ、弁辰において一定の社会的な意味を演じたのではないかと想像される。

②……………沃沮の考古学

『魏志』東夷伝に沃沮は高句麗の蓋馬大山の東に位置することを根拠に、沃沮が考古学的文化でいうクロウノフカ文化やあるいは団結文化に相当するという考えは既に林滙などによって述べられている [林滙 1985・1986]。クロウノフカ文化と団結文化はほぼ同じ文化であり、沿海州南部から豆満江流域にかけて分布する初期鉄器文化である。ここではクロウノフカ文化としてまとめて呼称することにするが、このクロウノフカ文化と嶺東地域との物質文化の関係が注目されている [劉銀植 2006a・2006b]。一つはオンドルなどの暖房施設、呂字形住居などの住居構造、さらに土器である。その一部は韓国南海岸地域の靉島まで見られ、オンドルと切株形把手甕が見られる。ここではまずそれらの関係を検討する前に、もう一度クロウノフカ文化そのものの内容を検討してみたい。特にオンドルの発生や呂字形住居の問題について言及することにしたい。しかしその前に、まずは土器編年について再考するとともに、実年代問題について言及することにしたい。幸いクロウノフカ1遺跡の発掘 [Komoto & Obata et al. 2004] に参加することができ、さらにクロウノフカ文化期の3号

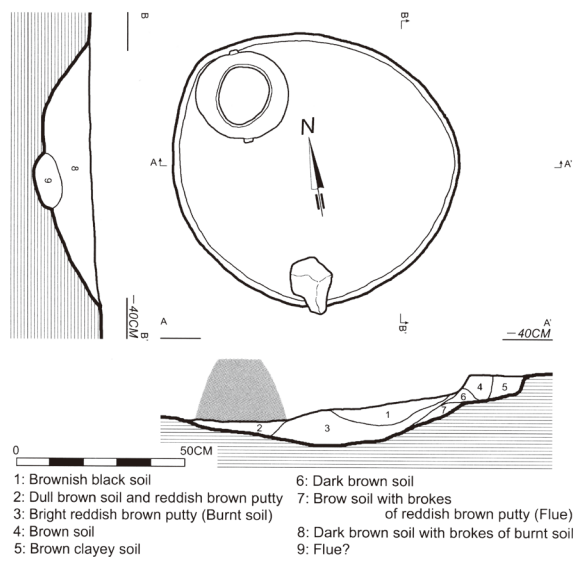
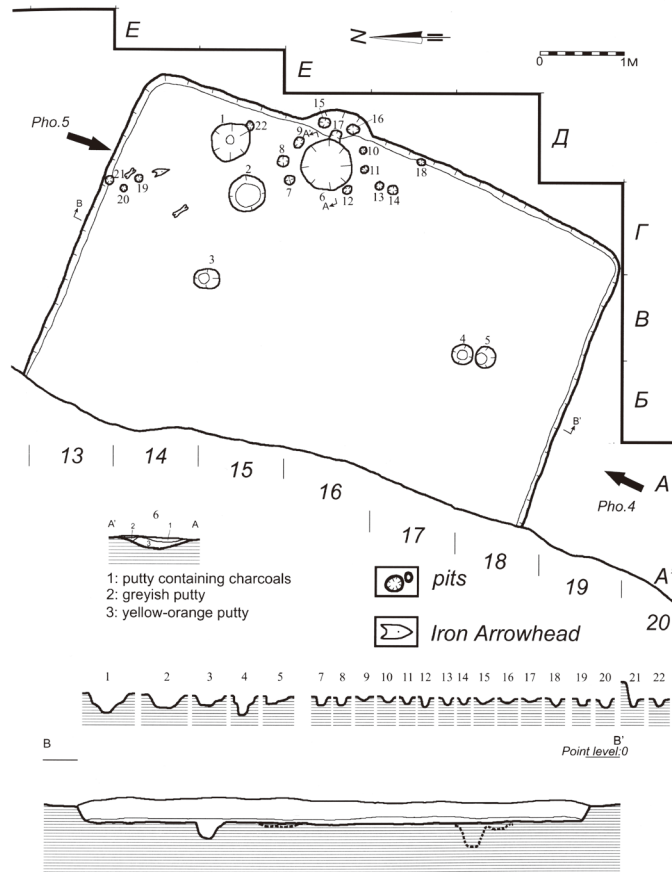


図12 クロウノフカ1遺跡2002年発掘3号住居

住居を発掘することができたことから、その発掘での経験を元に再考してみたいのである。

(1) 土器編年の再検討

クrouノフカ文化の土器編年に関しては、沿海州南部から豆満江流域にかけて、スイフン河流域、日本海沿岸地域、豆満江流域と大きく三地域に分けて、地域別の土器編年の大綱が、村上恭通氏によって既に明らかにされている [村上 1987]。ここでは最近の日露共同調査や韓露共同調査の結果を基に再考してみたく思っている。

2002年のクrouノフカ1遺跡における日露共同調査ではクrouノフカ文化期の火災住居である3号住居址(図12)が発見された [Komoto M. & Obata H. et al. 2004]。クrouノフカ1遺跡では、1957年と1968年にオクラドニコフらによって行われた発掘 [Окладников А. П., Броданский Д. Л. 1969] によって8基の住居址が発見されている(図13)。このうち3基はヤンコフスキー文化のもとのされ、残り5基がクrouノフカ文化期のものである [Броданский Д. Л. 1996]。ヤンコフスキー文化の住居は、2002年調査の3号住居のように長側壁の壁際に炉址を伴うものがあり、炉址とは反対側の長側壁側に入り口があるとすれば、平面形は南北方向に長いものであり、入り口から見れば横方向に長い横長の長方形住居とすることができるであろう。また、7号住居址とされるものは劉銀植氏が呂字形住居と指摘するもの [劉銀植 2006a・2006b] であるが、炉址は短側壁近くに位置する。炉址の位置に注目すれば、クrouノフカ文化期のもので確認できるすべての住居址が短側壁側に炉址があり、2002年調査3号住居址のものとは異なっている。1984年調査の2号住居址も呂字形住居とされるものであるが、7号住居と同じように短側壁側に同じように炉址が存在している。しかし、これら呂字形住居の小さな方形土坑が、韓国嶺東地区の呂字形住居と同じであれば、入り口側に相当し、この入り口付近に2号住居も7号住居も炉址が存在することになり、機能的には不都合である。韓国の呂字形住居の場合、炉は住居址の中央部に位置しており、この点でもクrouノフカ1遺跡の呂字形住居とは異なっている。クrouノフカ1遺跡の呂字形住居とされるものが、長方形住居短側壁の壁際に炉址が配置されることは、他のクrouノフカ文化期のものと同じである。したがって、2号住居址や7号住居址の呂字形をなす方形の小土坑は入り口ではなく、2002年調査の3号住居址に見られるように、炉から壁を隔てて煙突が出る構造と同じく、煙道部の施設をなすものが方形土坑として検出されたのではないだろうか。したがって、韓国嶺東地区の原三国期に見られる呂字形住居とは、異なるものであろうと推測されるのである。短側壁であろうと長側壁であろうと壁際に炉址が存在するという点が重要である。これは2002年調査3号住居で明らかになったように煙道付き炉址であり、カマド構造をなすものと考えられる。

そこで問題となるのが、クrouノフカ1遺跡で見られたヤンコフスキー文化期の横長長方形タイプの住居とクrouノフカ文化期の縦長タイプの住居である。ただし2002年調査3号住居址のものは、横長タイプの住居であるが出土土器はクrouノフカ文化期のものであることは間違いのない。そこで1957・1968年の発掘資料は、その土器がどの住居から出土したかの説明がないままにクrouノフカ1遺跡のクrouノフカ文化期の土器として図示されている [Окладников А. П., Броданский Д. Л. 1984, プロジャンスキー 1996・2000]。2002年調査3号住居址とこれらのクrouノフカ1遺跡の土器資料を比較すると(図14)、形態的にやや差違が認められる。例えば、壺は同

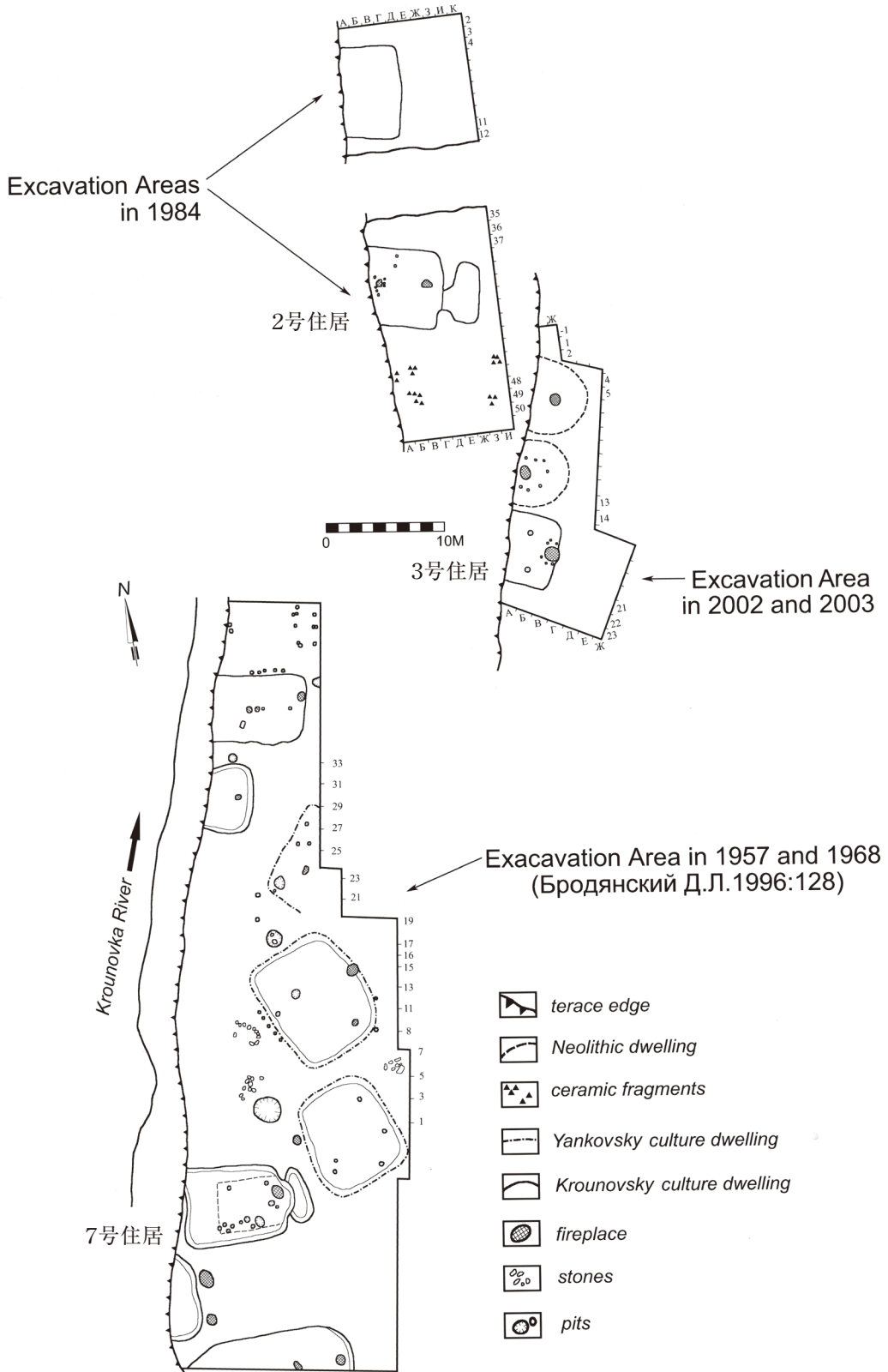


図13 クロウノフカ1遺跡における住居址の分布

じく短頸で外反するもの(図14-19・20)であるが、3号住居址の方が胴部最大径が胴部中央にあるのに対し、クロウノフカ1遺跡のもの(同25)は胴部上半に移動している。クロウノフカ文化期でも後半期と従来指摘のあった団結下層の土器(同35)を見ると、壺の場合口縁がより広口化して開き気味であるとともに、胴部の肩が張るように胴部最大径がより肩部へと移動している。仮に壺の胴部最大径が胴部中央部から次第に胴部上半から肩部へと変化していくとすれば、2002年調査3号住居址が最も古いものになる。1957・1968年発掘時のヤンコフスキー文化としたものは、ヤンコフスキー文化あるいはクロウノフカ文化の古段階のものであった可能性が高いであろう。住居址としても、入り口から見た場合の長方形プランで横長の住居から縦長の住居へと変化したものと推定できるのである。クロウノフカ文化の場合、団結文化や会寧五洞6期の6号住居址など豆満江下流域の同時期では、同じように縦長の住居形態を呈しており、縦長住居の方が新しいものであることが認められよう。

ここで相対的に、2002年調査クロウノフカ1遺跡3号住居址、1957・1968年調査クロウノフカ1遺跡資料、さらに団結下層2期というふうに相対順序を並べると、さらに1957・1968年調査クロウノフカ1遺跡資料と団結下層との間にプロチカ遺跡1号住居址[大韓民国国立文化財研究所・ロシア科学院シベリア支部考古学民族学研究所2004]やプロチカ遺跡15-ナ号住居址[大韓民国国立文化財研究所・ロシア科学院シベリア支部考古学民族学研究所2006]を置くことができるであろう(図14)。壺でいえば、口縁がすぼまった状態から次第に開き気味に変化するとともに、胴部最大径の位置が胴部中央から上方へさらに肩部へと変化していく。また、切株形把手付の深鉢状の甕は、口縁が窄まり気味で口縁端部でやや外反気味の2002年調査3号住居址資料(図14-21)、そして口縁が内湾化する1957・1968年クロウノフカ1遺跡資料(同26)、さらに口縁が内湾化するプロチカ遺跡1号・15-ナ号住居址資料(同33)、そして口縁が外反していく団結下層2期(同36)へと変化していく。団結文化に相当する団結下層は遺構の切り込み層位から1期と2期に分けられている[譚英傑ほか1991]。1期が2・4・6・9・12・13号住居址からなり、2期が1・3・5・7住居址からなっている。ここで言う1期は、1957・1968年調査クロウノフカ1遺跡資料にほぼ相当する。団結下層1期より新しい段階の団結下層2期を代表するのが1号住居址資料(同35~39)である[賈偉明1985]。これはプロチカ15-ナ号住居址より形式的に新しい段階のものであり、クロウノフカ文化で最も新しい段階の土器群とすることができるであろう。また、高杯もクロウノフカ1遺跡段階の皿状杯部に高く開く脚部が付くもの(同30)から、皿状の杯部で比較的長い脚部をもつ団結下層2期段階(同39)へと変化するものと考えられる。

一方、クロウノフカ文化より古い段階に一般的に位置付けられるヤンコフスキー文化の資料も、近年の日露合同調査によって得られている(図14)。一つがクラーク5遺跡の資料であり[Miyamoto K. 2007]、もう一つがシルク岬採集品[Furusawa Y. and Obata H. 2007]である。これらは相対的にクラーク5遺跡の資料の方がシルク岬採集品より古い可能性がある。その一つの根拠は無形壺(図14-3・12)に見られる文様の退化傾向である。同じように深鉢(甕)では口縁に隆帯を貼り付けているクラーク5遺跡資料(同6・7)に対し、シルク岬の深鉢(甕)は既に隆帯がなくなっている(同13)。このような点から、一応相対的にクラーク5遺跡が古くシルク岬が新しい段階のヤンコフスキー文化期のものと推定できる。

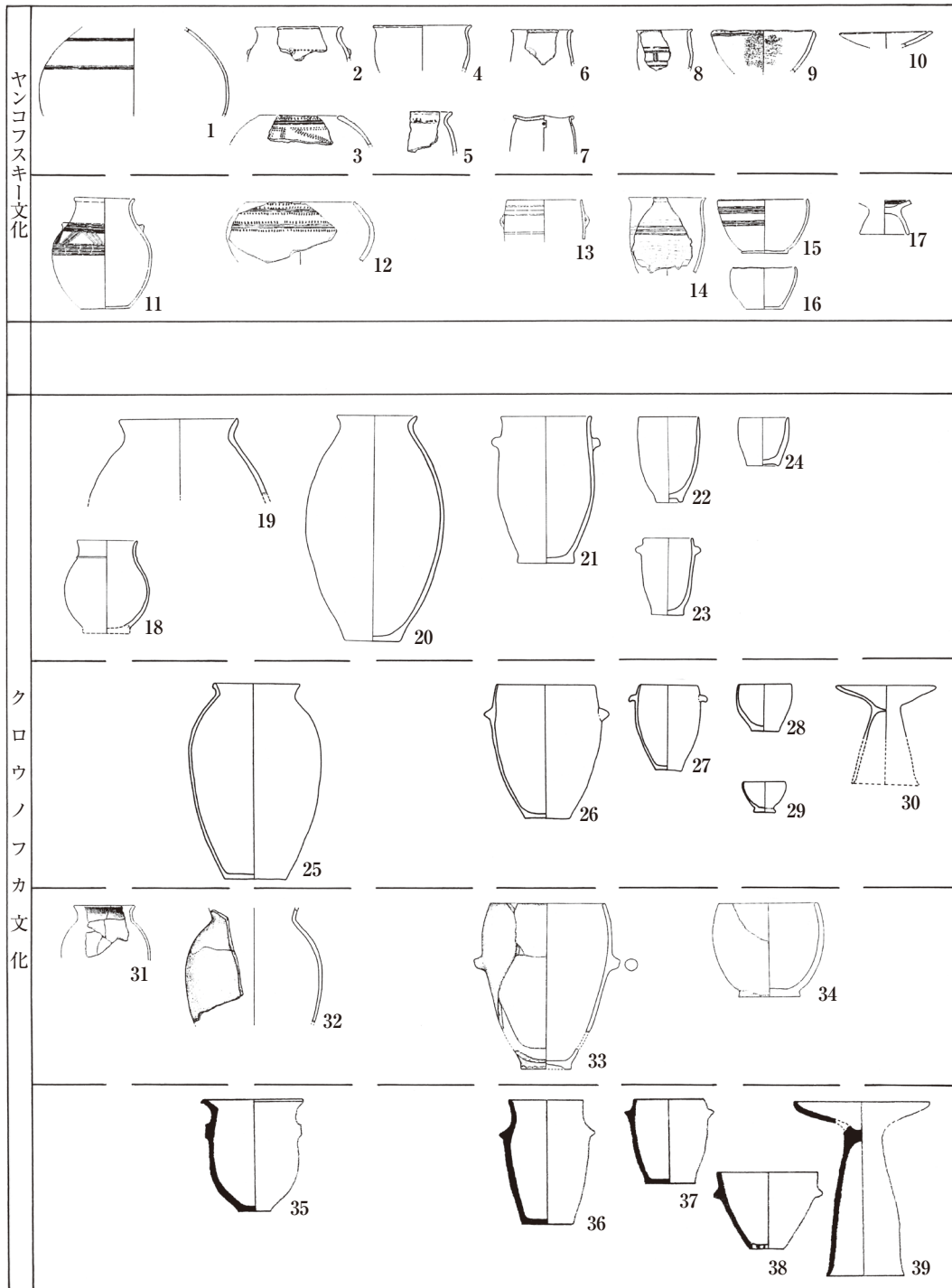


図14 ヤンコフスキー文化とクロウノフカ文化の土器変遷

(1~10: クラーク5, 11~17: シルク岬, 18~24: クロウノフカ3号住居, 25~30: 1957・1968クロウノフカ1, 31~34: プロチカ15-ナ号住居, 35~39: 団結下層1号住居, 縮尺25~30・35~39を除いて1/14)

さて、これら相対年代が決定した上で、絶対年代を付していかなければならない。その一つの根拠がクラーク5遺跡の甕(図14-5)の表面に付着した付着炭化物の放射性炭素較正年代である895-765calBC年である[Nishimoto T. et al. 2007]。そして2002年調査クローノフカ1遺跡3号住居址内の木炭で測定した較正年代(2 σ 暦年代範囲)は、330-200calBCと380-200calBCである⁽⁴⁾。さらにプロチカ遺跡1号住居では60calBC、プロチカ15-ナ号住居址では370-50calBCや390-1calBCという放射性炭素較正年代が測定されている。また、団結下層からは五銖銭が出土しており[譚英傑ほか1991]、紀元前1世紀以降にその年代の定点があるであろう。また、団結下層2期の1号住居址の放射性炭素年代は較正年代で1885 \pm 80calBPで[賈偉明1985]、紀元後1世紀が妥当であろう。したがって、ここで提示したヤンコフスキー文化は前9・8世紀のものであり、さらにクローノフカ文化が前3世紀から紀元後1世紀にかけてのものとして判断される。このクローノフカ文化の年代は、オクラドニコフ・ブロンジャンスキーの推定年代とほぼ同じものである[Окладников А. П., Броданский Д. Л. 1984]。我が国の弥生時代との対比でいえば、ここで提示したヤンコフスキー文化は弥生早期に年代の1点が存在し、さらにクローノフカ文化は弥生中期～後期前葉という年代の併行関係が考え得るであろう。

(2) 暖房施設

劉銀植によれば、沿海州南部の暖房施設は煙突が直接炉から外部へ直線的に出るタイプのカマド式のものから、規矩形、コ字形がみられ、このように時間的に変化していくという[劉銀植2006a・2006b]。同じような考え方は、既に韓永熙によって述べられており、トンネル式の煙道が直線的なものから、規矩形、そしてコの字型へと発展していくと考えられていた[韓永熙1983]。ここでいう暖房施設とは、後に中国で見られるベッドに伴う煙道施設の炕[大貫1989]とは異なり、堅穴住居内部に土と石でトンネル状の煙道をもつものをいう。厳密な意味では、大貫静夫が指摘するようにオンドルとは床暖房のことであり、この場合は壁暖房といえることができる[Onuki1996]が、ここでは韓国考古学界で呼ばれているようにトンネル形炉址と呼んでおく。

クローノフカ3号住居ではカマド状の炉(図12)が見られる[Komoto M. & Obata H. et al. 2004]。その構造は、住居の長側壁の中央壁際に炉を持つもので、炉から壁越しに煙道(図12下図-9と図12上図-17)が住居外側に排出されるものであった。まさしく炉の煙出しが住居外側に存在するもので、住居壁外部には煙突が存在していた可能性が高い。炉での高温による焼成が住居外部に煙を出すことによって効率的に行われていたことが理解される。発掘時の検出状況からすれば、炉である円形の浅い掘り込みには焼土がたまっていた状態で、そこに甕が伏せたように底を上にした倒立した状態で発見された。この浅い円形の炉址の周囲には円形に沿って柱穴列がみられ、また炉址には人頭大の礫が存在したことからも、炉には壁立ち状の立体的な構築物が有り、その構築物を作るに際し、柱穴列にみられるような組み物をして粘土を貼る際の筋としたのではないかと想像される。そして壁立ちのドーム状の構築物の上には円形の穴が開き、底に甕が設置されていたのではないだろうか。また人頭大の礫は火を受けており、こうした甕の底部を支えるために置かれていた支脚ではないかと判断される。まさに造り付けカマド[杉井1996]が存在していたのである。住居焼失時の崩壊によってこのカマドの壁体が崩れ、カマドに載せられていた甕が転倒して倒立した

状態で発掘時に発見されたのではないだろうか。こうした造り付けカマドは、壁カマドとも称する〔Onuki1996〕ことができるであろう。

クrouノフカ1遺跡ではこのような長側壁に接して炉が存在する住居がヤンコフスキー文化期の住居に存在することが知られている〔Броданский Д. Л.1996〕。ヤンコフスキー文化とされる住居に伴う土器が不明であるところから確認できないが、現状ではこの3号住居より早い時期ないし同じ時期のものである。壁際に接して設置された炉であることから、3号住居と同じカマドであったと想定される。1957・1968年に発掘されたクrouノフカ期の縦長住居は、3号住居とは異なり短側壁に炉址が存在するものであり、住居構造に変化がみられるものの、壁際に炉址がある点では同じであり、煙道をもち外部に煙突で煙を排出せねば火事になるという理由からみれば、これらもカマドであったと想定できる。そこで既に指摘した7号住居や1984年発掘の2号住居の炉に接した壁際にある方形の土坑はおそらくは煙道や煙突に付随した構造物と想定できる。

3号住居の年代は、住居内の木炭の放射性炭素年代から前3世紀前半ということが出来るであろう。この住居址では鍛造鉄器が伴う。この地域の特徴的な形態の銛であり、在地生産品であると考えられる。鉄器技術は燕との接触の中に生まれたものとするれば、前3世紀に存在することには問題ないであろう。鑄造鉄器は燕との接触によってもたらされたと考えべきであるが、鍛造鉄器の場合、燕以外にも青銅器の伝播過程でみられた嫩江流域からオロンバイルさらにモンゴル高原といったルートによるタガール文化やチャンドマン文化の鍛造鉄器技術の流入が存在しないのか、今後注目しておく必要がある。

また、呂字形住居構造がクrouノフカ1遺跡に生まれていたという痕跡はないことから、原三国文化期に豆満江下流域を介して嶺東地域へ伝播した可能性は存在しないということが出来るであろう。しかし、前3世紀には存在していた2002年調査の3号住居址にみられる壁カマド構造は、今のところ最も古い壁カマド構造であり、壁カマド構造が沿海州南部において創造されたものである可能性が高まった。なお、会寧五洞の6号住居址〔朝鮮民主主義人民共和国科学院及び民俗学研究所1960〕の南壁に石と粘土で馬蹄形に付設した燃焼施設も壁カマドであろう。このように壁カマドは沿海州南部から豆満江下流域にかけてのクrouノフカ文化期存在している。

プロチカ遺跡1号住居址では前1世紀前半には存在していたと考えられるが、その暖房施設の構造は石積みによる直線形トンネル形炉址である。同型式の土器をもつプロチカ遺跡15-ナ号住居址では規矩形トンネル形炉址が出現しており、規矩形トンネル形炉址は紀元前1世紀以降に出現しているといえよう。こうした規矩形トンネル形炉址は、バイカル湖南の匈奴のイヴォルガ故城にも見られ、その年代は遅くとも後漢初頭以前〔潘玲2007〕であり、前漢を中心とする城址であることから、規矩形トンネル形炉址が前1世紀に存在していても問題はない。

先の土器編年でも示したように、2002年の調査クrouノフカ1遺跡3号住居址、その他のクrouノフカ遺跡土器資料、プロチカ1号住居址、団結下層2期1号住居址という時間軸が考えられた。クrouノフカ1遺跡3号住居址は、壁に接して設置されたカマドから煙道が壁越しに設置されるタイプであり、最も初期的な壁カマド構造と想定できる。従来トンネル形炉址の最古式とされた直線的な煙道に比べ、壁に対する被熱性という意味でも原始的である。むしろ壁に対する被熱性を避けるために煙道が長くなり、直線的な煙道や規矩形煙道が発達したと考える〔Onuki1996〕のが一般



図15 トンネル形炉址の分布

(1クロウノフカ, 2団結, 3アレニーA, 4プロチカ, 5キエフカ, 6ペトロフ島, 7松坪洞, 8老河深, 9イヴォルガ, 10土城里, 11魯南里, 12細竹里, 13蓮花堡, 14西屯洞, 15漢沙里, 16大城里, 17栗文里, 18柯坪里, 19府院洞, 20勒島)

的であろう。そこでこのような壁に接して炉を設け壁から直接煙道を付して煙を戸外に排出する、いわゆる造り付けカマドの段階を古式段階と考え、これを壁カマド構造と呼ぶことにしたい。その年代は前3世紀である。クロウノフカ1遺跡のヤンコフスキー文化段階にも壁カマド構造があるが、それがヤンコフスキー文化のものであるかクロウノフカ古段階のものであるかは、現段階では検証ができない。仮にこれが正しければ、ヤンコフスキー文化段階から壁カマド構造が出現していたことにもなる。この他のクロウノフカ遺跡2号・7号住居は2002年3号住居に次ぐ段階であり、実際の構造は不明であるが、2号や7号住居は壁カマド構造を有していたと想定される。

プロチカ遺跡1号住居址は煙道が石積み直線的に伸びるものであり、クロウノフカ遺跡3号住居址のものが進化し暖房用の機能が高まったものである。これと同じような構造体をもったものは、慈江道時中郡魯南里遺跡2号住居址[朝鮮社会主義人民共和国社会科学院考古研究所1977]に知られる。この場合、一つの住居址内に直線的な煙道のトンネル形炉址と規矩形トンネル形炉址の二つが配置されており、直線的なものから規矩形煙道への発展期とも思える。プロチカ1号住居址は放射性炭素年代からは前1世紀前半であるが、前2世紀にこうした構造が生まれた可能性がある。コ字形トンネル形炉址は団結下層1期の9号住居址に見られるが、その較正年代は $110 \pm 105\text{calBC}$ であり、規矩形オンドル施設をもつ団結下層2期の1号住居址は、較正年代で $65 \pm 85\text{calAD}$ である[譚英傑ほか1991]。すでに述べたようにイヴォルガ故城の例から見ても、規矩形トンネル形炉址はおそらくは前1世紀には出現していたであろう。このように規矩形やコ字形の煙道をなすトンネル形炉址は、紀元前1世紀には出現し、紀元後1世紀において盛行していったとすることができるであろう。

このように見ていくと壁カマド構造から煙道が室内で伸びるトンネル形炉址が前3世紀以降に沃沮地域で発展したようにも思えるが、この他の地域にもトンネル形炉址が知られる(図15)。鴨緑江上流域では魯南里や中江郡土城里、渾江流域では遼寧省撫順市蓮花堡、清川江以南の平安北道寧辺郡細竹里、平安南道北倉郡大坪里などにも知られる[韓永熙1984、大貫1989]。これらの遺跡はいずれも燕の遼東郡設置以降と密接に関連する遺構であり、いずれも前3～1世紀に納まるものであろう。大貫静夫は、必ずしもすべてではないが、遼東から鴨緑江中・上流域や清川江流域までが平地式住居にトンネル形炉址をもつものと、それ以外の堅穴住居にトンネル形炉址を持つものに区分し、基本的には前者から後者への流れを想定している[大貫1989]。この場合、直接的証拠はないものの、これ以前に華北でカマドが出現していることから、華北のカマドと前者の遼東から清川地域との何らかの関係を想定しての推論である。

これらトンネル形炉址施設が沿海州南部から豆満江流域の沃沮地域の影響で生まれたか、あるいは遼東から西北朝鮮で先に生まれたものであるかは、今しばらく検討の余地がある。ただし、トンネル形炉址の前進と考えられる壁カマドが沃沮地域に存在することは、この地域からトンネル形炉址が生まれた可能性を否定するものではないであろうし、現状では壁カマドが鴨緑江流域や遼東で認められないところからも、沃沮地域で壁カマドからトンネル形炉址が発達した可能性が最も高いであろう。また、クロウノフカ文化期から出現する甑も壁カマドやトンネル形炉址の出現と一定の関係があるものと推測される。

(3) 沃沮と朝鮮半島

規矩形トンネル形炉址はその後朝鮮半島南部に広がっていく。その分布地域は嶺東や嶺西あるいは嶺南地域であり(図15)、朝鮮半島の東岸である。こうしたトンネル形炉址が前1世紀末～後1世紀には靺鞨までいち早く到達したのではないだろうか。嶺東や嶺西と豆満江流域から沿海州南部の沃沮すなわちクロウノフカ文化との関係が論ぜられる[劉銀植2006a・2006b]時、呂字形住居址に関しては難しいことを既に述べたが、トンネル形炉址に関しては、沃沮がその発信源である可能性がある。沃沮を中心として、一つは鴨緑江中上流域から遼東あるいは清川江流域へ、もう一つは豆満江下流域を通りながら、嶺東、嶺西地域から嶺南地域さらには靺鞨へという伝播ルートが想定

できる。さらに別方向への伝播ルートとしては吉林省榆樹老河深下層、さらにはイヴォルガ古城といった、夫余から匈奴への伝播ルートである。これは既に触角式銅剣でも述べたような嫩江流域から大興安嶺を超えオロンバイルからモンゴル高原、さらにバイカル湖畔へと行ったルートであったかもしれない。

ともかく、沿海州南部の綏芬河流域から豆満江下流域に広がるクロウノフカ文化の土器に関しては、器種的にも器形的にも嶺東地域や嶺西地域の土器と一定の類似が認められる [劉銀植 2006a]。例えば切株形把手をもつ甕や甑などが挙げられるであろう。さらに、土器の調整など土器製作技術面においても完全な一致を見ないまでも、両者は類似性が高い状況にある [劉銀植 2007]。こうした観点から、咸鏡南道を含めた豆満江下流域から嶺東地域に至る中間地域での比較検討が必要であるが、現状では不可能な状態にある。そうした中、土器とともにトンネル形炉址を含めた暖房施設の文化流入もある程度考慮する必要がある。そこで注目すべきは、クロウノフカ文化の終末期の問題である。クロウノフカ文化の開始年代に関しては、鉄器の出現を含めて本稿では前3世紀と比定している。姜仁旭は沿海州南部の青銅器時代後期の放射性炭素年代を参考にしながら、前5世紀に比定している [姜仁旭 2007]。ただし青銅器時代後期の放射性炭素年代には前5世紀を示す事例が複数見られ、それを重視するならば、青銅器時代後期に次ぐクロウノフカ文化を早くとも前4世紀に置かなければならないであろう。むしろ問題なのはその終末期の問題である。姜仁旭は豆満江下流域のクロウノフカ文化を、甑の底部孔の数などを考慮に、五洞6期→虎谷6期→草島5期とした上で、ポリツェ文化である五洞7期を迎え、初期鉄器時代の終末とする [姜仁旭 2007]。終末期の年代を紀元前後とするが、ボルチカ遺跡の調査によってもクロウノフカ文化からポリツェ文化への転換はほぼ同じものであると考えられている。おそらくは沿海州南部の海浜部にはポリツェ文化が南進し、海浜部ではその影響は豆満江下流域の五洞遺跡まで紀元前後に達したと思われる。スイフン河内陸部の団結遺跡などでは紀元後1世紀までクロウノフカ文化が存続するものの、海浜部に関してはポリツェ文化の南進が認められるのである。仮にクロウノフカ文化への嶺東地域や嶺西地域への影響があるとすれば、ポリツェ文化の南進こそが導因となっている可能性がある。すなわち豆満江下流域のクロウノフカ文化民の南への移住などが想定できるのである。その年代は紀元前後であり、嶺東や嶺西にクロウノフカ文化特有な土器が出現する時期をこの時期と考えるならば、大きな矛盾は生まれないであろう。嶺南の海岸地域に位置する靉島遺跡で切株形把手の甕やトンネル形炉址住居が出現する時期とも大きな矛盾は感じられない。

おわりに一夫余・沃沮と東夷

朝鮮半島の先史社会を考えるとき、文化的な系統や系譜問題、あるいは地域間関係を考えるとき、常に西海岸を巡る地域文化の動態と東海岸を巡る文化動態の二つに注意しなければならない。新石器時代から青銅器時代においても農耕の伝播を考えるときは西海岸の動きに注目されるし [宮本 2007c]、一方では漁具の伝播過程では東海岸の動き [渡辺 1995] に注目された。その点で今回問題にした初期鉄器時代にあっては、細竹里－蓮花堡類型あるいは楽浪郡という西海岸の動きとともに、触角式銅剣やクロウノフカ文化に見られる夫余・沃沮という東海岸あるいは内陸部との文化接触や

地域間関係にも注目すべきといえることができるであろう。また前者の細竹里-蓮花堡類型や楽浪郡が燕や漢王朝という殷周文化の系統にあるものに対して、夫余・沃沮はその外縁にありながら、一方では匈奴などの北方青銅器文化との接触を持ちながらも、燕や漢王朝に接する外縁にあることによって大きな社会変化を生んだ地域社会でもある。夫余や沃沮を含む東夷という地域は、燕・漢や匈奴との直接的あるいは間接的な接触によって、個々の地域社会が古代国家への歩みを牽引させた地域社会という共通の歴史的な認識を持つことができるであろう。

文献収集にあたっては、劉銀植さんや大貫静夫さんならびに中村大介氏のお世話になった。記して感謝申し上げたい。

註

- (1)——既に別稿(宮本2002)でも述べたように、土城洞486号墓出土銅剣は、報告の実測図(金信奎1994)と異なったものを用いている。これは小田富士雄氏が撮影した平壤出土触角式銅剣(小田1997)を土城洞486号墓の触角式銅剣と推定し、撮影された写真を基に図化したものである。
- (2)——大嶺郷出土の触角式銅剣は、2002年に黒龍江省阿城の金上京歴史博物館で観察した際に取ったメモを基に作図したものであり、正確ではない。
- (3)——嶺南大学の鄭仁盛さんからご教示いただいた。
- (4)——国立歴史民俗博物館によってAMS年代測定がなされているが、公表されていない年代測定値である。

参考文献

〈日本語〉

- 梅原末治 1933 「支那出土の有柄銅剣」『人類学雑誌』第48巻第2号
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号
- 大貫静夫 1989 「極東における平地住居の普及とその周辺」『考古学と民族誌』六興出版
- 小田富士雄 1997 「一鑄式銅剣」覚書『研究紀要』第1号(下関市立考古博物館)
- 白鳥庫吉 1896 「弱水考」『史学雑誌』第7編第11・12号
- 白鳥庫吉 1936 「夫余国の始祖東明王の伝説に就いて」『服部先生古稀祝賀記念論文集』
- 杉井健 1996 「朝鮮半島における竈の特質および日本列島との相関関係」『青丘学術論集』第12集
- 武末純一 2004 「楽浪系土器、三韓系土器、三国系土器」『大和王権と渡来人 3・4世紀の倭人社会』大阪府弥生文化博物館
- プロジャンスキー・ディ・エリ 2000 「ロシア沿海地方の初期鉄器時代」『東夷世界の考古学』青木書店
- 宮本一夫 1999 「オルドス青銅器文化の地域性と展開(上)(下)」『古代文化』第51巻第9号・第10号
- 宮本一夫 2002 「東北アジアにおける触角式銅剣の変遷」『清溪史学』16・17合輯(『姜仁求先生教授停年記念東北亜文化論叢』)
- 宮本一夫 2006 「杏家荘2号墓出土の遼寧式銅剣」『東方はるかなユートピア-烟台地区出土文物精華-』山口県立萩美術館・浦上記念館
- 宮本一夫 2007a 「エルミタージュ美術館所蔵ミスシンスク地方の青銅器」『東アジアと日本-交流と変容-』第4号
- 宮本一夫 2007b 「漢と匈奴の国家形成と周辺地域-農耕社会と遊牧社会の成立-」『東アジアと日本-交流と変容- 統括ワークショップ報告書』(九州大学21世紀COEプログラム)
- 宮本一夫 2007c 「中国・朝鮮半島の稲作文化と弥生の始まり」『弥生時代はどう変わるか』学生社
- 宮本一夫 2008a 「遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える」『史淵』第145輯
- 宮本一夫 2008b 「中国初期青銅器文化における北方青銅器文化」『長城地帯青銅器文化の研究』(シルクロード学研究29)
- 村上恭通 1987 「東北アジアの初期鉄器時代」『古代文化』第39巻第9号
- 渡辺誠 1995 「朝鮮海峡における漁民の交流」『日韓交流の民族考古学』名古屋大学出版会

〈中国語〉

- 賈偉明 1985 「論團結文化的類型，分期和相關的問題」『考古与文物』1985年第1期
吉林省文物考古研究所編 1987 『榆樹老河深』文物出版社
宋玉彬 2002 「図們江流域青銅時代の幾個問題」『北方文物』2002年第4期
譚英傑ほか 1991 『黒龍江区域考古学』中国社会科学出版社
張偉 2005 「松嫩平原戦国兩漢時期文化遺存研究」『北方文物』2005年第4期
潘玲 2007 『伊沃爾加城址和墓地及相關匈奴考古問題研究』科学出版社
梁志龍・魏海波 2005 「遼寧本溪県朴堡発現青銅短劍墓」『考古』2005年第10期
林滢 1985 「論團結文化」『北方文物』第1期
林滢 1986 「肅慎，挹婁和沃沮」『遼海文物学刊』創刊号

〈韓国語〉

- 韓永熙 1984 「住居生活」『韓国史論』13下
姜仁旭 2007 「豆満江流域青銅器時代文化の変遷過程に対して－東北韓土器の編年及び周辺地域との比較を中心に」『韓国考古学報』62輯
金信奎 1994 「土城洞 486号木槨墓発掘報告」『朝鮮考古研究』1994年第4期
大韓民国国立文化財研究所・ロシア科学院シベリア支部考古学民族学研究所 2004 『沿海州プロチカ遺跡Ⅰ（第4次韓・露共同発掘調査）』
大韓民国国立文化財研究所・ロシア科学院シベリア支部考古学民族学研究所 2006 『沿海州プロチカ遺跡Ⅲ（第6次韓・露共同発掘調査）』
朝鮮民主主義人民共和国科学院及び民俗学研究所 1960 『会寧五洞原始遺蹟発掘報告』遺蹟発掘報告第7集
朝鮮社会主義人民共和国社会科学院考古研究所 1977 『朝鮮考古学概要』
プロジェクトスキュー・デュ・エリ（鄭楷培訳）1996 『沿海州の考古学』学研文化社
劉銀植 2006a 「豆満江流域初期鉄器文化と中部地方原三国文化」『崇実史学』第19輯
劉銀植 2006b 「沿海州初期鉄器文化と韓半島中南部地方の関連性－クロウノフカ文化を中心に－」『韓・露共同発掘特別展 アムール・沿海州の神秘』文化財庁国立文化財研究所
劉銀植 2007 「土器の製作技法に見る沿海州と江原道資料検討－沿海州ホルチカ遺跡出土資料を中心として－」『第31回韓国考古学全国大会発表資料集 国家形成に対する考古学的接近』

〈英語〉

- Furusawa Yoshihisa & Obata Hiroki. 2007 Archaeological Collections in the Posjet Village. In Archaeological Collections in the Posjet Bay, in Primorsky, Russia Result of Investigations in 2006, Kumamoto: 35-60.
Komoto Masayuki & Obata Hiroki et al. 2004 Krounovka 1 Site in Primorye, Russia: Report of Excavations in 2002 and 2003. Kumamoto, Japan.
Onuki Shizuo. 1996 The development of the heating system and above ground dwelling in the North east Asia. In The First International Symposium of Bohai Culture, Vladivostok: 55-59.
Miyamoto Kazuo. 2007 Pottery. In Klerk 5 Site, in Primorsky, Russia Preliminary Result of Excavation in 2005, Kumamoto: 17-26.
Nishimoto T. et al. 2007 The age of Klerk-5 site (Charcoal and carbon on the pottery shard) . In Klerk 5 Site, in Primorsky, Russia Preliminary Result of Excavation in 2005, Kumamoto: 47-48.

〈ロシア語〉

- Окладников А. П., Броданский Д. Л. 1969 Раскопки Многослойного Поселения у с. Кроуновка в Приморье // Археологические Открытия. с.208-210. Москва.
Окладников А. П., Броданский Д. Л. 1984 Кроуновская Культура // Археология Юга Сибири и Дальнего Востока. с.100-114. Новосибирск.
Броданский Д. Л. 1996 Анучинская культура.- в сб.; Освоение Северной Пацифики.

(九州大学大学院人文科学府，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理，2008年12月24日審査終了)

Fuyu and Woju Viewed from an Archaeological Perspective

MIYAMOTO Kazuo

Fuyu was an ancient state that appeared around the area of Jichang. In this paper, the author shows that the antennae-type bronze swords that first appeared in the Jichang region in the 5th century B.C.E. were the result of cultural contact among the peoples from the Hulunbuir plains on the other side of the Daxingan Mountains from the Neng River to the Mongolian Plateau, and that they belonged to a northern bronze culture that was established independently from Liaoxi. The author also identifies changes and developments in antennae-type bronze swords based on a chronology for Liaoning-type swords and narrow swords, the type used for the body of the sword. It was found that these swords were distributed from the Jichang region to the Korean Peninsula. The IIC-type antennae-type iron sword from the 2nd century B.C.E. and the antennae-type V-type iron sword dating from the 1st century B.C.E. are distributed in the Jichang region only, and developed as iron swords that symbolized the Fuyu at the time when Fuyu became politically united. The author also made a study of Laoheshen funerals that took place at cemeteries dating from the 1st century B.C.E. through to the first half of the 1st century C.E. Using the differences in rank based on the composition of funerary items that have a correlation to grave area and the number of funerary items, the author extracted four different ranks (A, B, C and D) and their subtypes. By verifying the grave distribution for each type of funerary item, the author identified a distribution of three clusters of cemeteries. That is to say, the existence of a relative difference in the ranks of the groups emerged in order from the southern cluster to northern cluster to the middle cluster. The A1-type cemetery for those of the highest rank who had prestige items such as helmets, Han mirrors and 'fu' cooking vessels was a male cemetery consisting of three graves, which occupied a certain position within the southern cluster. We may assume that society evolved, to one that buried couples together with the male taking precedence, to a patriarchal society, based on archaeological evidence that buried females and males together but in different pits. A1-type graves are those of clan chieftains. A patriarchal society developed based on patrilineal descent and the differences in rank of the clan units are evident from the southern, northern and middle clusters. We may speculate that the royal family located in Jilin stood at the apex of this hierarchical structure for these clan units. From the existence of the Dongming myth detailing the clan's primogeniture confirmed to date from the 1st century C.E, it is possible that by this stage,

if not earlier, sovereignty had already been established. Given the hierarchical relationships at the Laoheshen cemetery and the existence of V-type antennae-type bronze swords, the establishment of sovereignty in Fuyu most likely goes back to the 1st century B.C.E.

In terms of archaeology, the culture of Woju is comparable to the Krounovka culture. Sub-typing pottery chronology for Krounovka culture revealed that wall furnaces gave way to tunnel-shaped fire pits with linear flues, which then evolved into standard tunnel-shaped fire pits. Thus, the author demonstrates that it is possible that the origin of heating systems such as the kang lies in the wall furnaces found in Krounovka culture. The author also explains that the spread of this sort of heating to surrounding areas and then further to the Yeongdong, Yeongseo and then the Yeongnam regions of the Korean Peninsula, possibly had an effect on some pottery types as well. The author concludes that a contributing factor to this sequence of cultural influences was the progression southward of Pol'tse culture that occurred around the beginning of the Christian era.

Keywords: Fuyu, antennae-type bronze sword, Woju, Krounovka, kang